

丘の公園地内遺跡範囲  
確認調査(第1次)報告書  
(丘の公園第1・2・3・4遺跡)

1987.3

山梨県教育委員会  
山梨県企業局

## 序

本報告書は、県営ゴルフ場建設に先立ち、1986年6月～9月に実施した山梨県北巨摩郡高根町清里の「丘の公園地内遺跡範囲確認調査（第1次）」の結果をまとめたものであります。

当調査地域は、森林が大部分を占め、従来遺跡の所在はほとんど知られておりませんでしたが、当埋蔵文化財センターが1983年度から85年度までの3次にわたって行なった「八ヶ岳東南麓遺跡分布調査」で、ナイフ形石器・槍先形尖頭器などの先土器時代の石器や縄文時代早期の土器や陥し穴など、先土器時代から縄文時代の遺物・遺構出土地点13カ所を確認いたしました。

今回の調査は、「八ヶ岳東南麓遺跡分布調査」で確認された遺物・遺構出土地点について、さらに細かく試掘坑を設定し、遺跡としての広がりを確認して、開発計画と遺跡保存との調整を行なう資料を得るためのものであります。10カ所の遺物・遺構出土地点について範囲確認調査を行ない、試掘坑の数は合計571カ所の多きに及びました。

調査の結果、4カ所の遺跡を確認し、それぞれ「丘の公園第1・2・3・4遺跡」と命名致しました。丘の公園第4遺跡は縄文時代の焼上遺構のみでしたが、他の遺跡は先土器時代から縄文時代にわたる複合遺跡であります。特に丘の公園第1遺跡は面積14000m<sup>2</sup>にも及ぶ巨大遺跡で、先土器時代の遺跡としては県下最大の規模であります。

本調査の成果によって、開発事業と遺跡保存との有り得べき関係を築くための有効な基礎資料が得られたと信じます。

末筆ながら、お世話をなった関係機関各位、並びに直接調査に当たられた方々に厚く御礼申し上げます。

1987年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

## 例　　言

1. 本報告書は、県企業局による「丘の公園」建設事業の第2期工事に先立ち行なった、丘の公園地内の遺跡範囲確認調査（第1次）報告書である。
2. 本調査は、県企業局の委託を受け、山梨県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査および整理作業は、山梨県埋蔵文化財センターで行なった。担当者は、保坂康夫。
4. 本書は、保坂が執筆・編集した。遺物写真撮影は、塙原明生（日本写真家协会会员）が行なった。
5. 本書にかかる出土品および写真・図面は、山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
6. 整理作業参加者は、下記のとおりである。（敬称略、順序不同）  
名取洋子、弦間千鶴、石川操、遠藤映子、松野和美、新津重子、高野俊彦、出月多津子  
宇野和子、五味信子
7. 調査から報告書作成までの間に、次の方々から御協力、御助言を賜った。衷心より御礼申し上げる次第である。（敬称略、順序不同）  
利根川欽一、谷口彰男、大芝公彦、河西学（山梨文化財研究所）、白倉民雄、雨宮正樹  
(高根町教育委員会)

## 目 次

I	調査に至る経緯	1
II	調査組織	2
III	遺跡の位置と環境	3
IV	調査の方法と経過	5
V	調査の成果	
	丘の公園第1遺跡	
1.	試掘坑の配置	5
2.	遺跡周辺の地形	7
3.	層序	7
4.	遺構	9
5.	遺物	
a.	先土器時代の遺物	18
b.	縄文時代の遺物	23
	丘の公園第2遺跡	
1.	試掘坑の配置	24
2.	遺跡周辺の地形	24
3.	層序	25
4.	遺物	26
	丘の公園第3遺跡	
1.	試掘坑の配置	29
2.	遺跡周辺の地形	29
3.	層序	30
4.	遺物	31
	丘の公園第4遺跡	
1.	試掘坑の配置	32
2.	遺跡周辺の地形	32
3.	層序	33
4.	遺物	33
VII	遺跡の分布と範囲	34

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図	2	第14図 丘の公園第1遺跡出土土器(1)	20
第2図 調査地域位置図	4	第15図 丘の公園第1遺跡出土土器(2)	21
第3図 丘の公園第1遺跡試掘坑配置 状況および遺跡範囲図	6	第16図 丘の公園第1遺跡出土縄文時 代石器	22
第4図 丘の公園第1遺跡土層断面図	8	第17図 丘の公園第2遺跡試掘坑配置 図	24
第5図 丘の公園第1遺跡遺物出土状 況図	9	第18図 丘の公園第2遺跡土層断面図	25
第6図 丘の公園第1遺跡出土石器(1)	10	第19図 丘の公園第2遺跡出土石器(1)	27
第7図 丘の公園第1遺跡出土石器(2)	11	第20図 丘の公園第2遺跡出土石器(2)	28
第8図 丘の公園第1遺跡出土石器(3)	12	第21図 丘の公園第3遺跡試掘坑配置 図	30
第9図 丘の公園第1遺跡出土石器(4)	13	第22図 丘の公園第3遺跡土層断面図	31
第10図 丘の公園第1遺跡出土石器(5)	14	第23図 丘の公園第3遺跡出土石器	31
第11図 丘の公園第1遺跡出土石器(6)	15	第24図 丘の公園第4遺跡試掘坑配置 図	32
第12図 丘の公園第1遺跡出土石器(7)	16	第25図 丘の公園第4遺跡土層断面図	33
第13図 丘の公園第1遺跡出土石器(8)	17		

## 図版目次

図版 1	丘の公園第1遺跡調査風景	図版 5	丘の公園第1遺跡出土石器(3)
	丘の公園第1遺跡E10試掘坑遺 物出土状況	図版 6	丘の公園第1遺跡出土土器
図版 2	丘の公園第4遺跡焼土遺構(昭 和59年度分布調査時出土)	図版 7	丘の公園第1遺跡出土遺物
	丘の公園第4遺跡焼土遺構拡大	図版 8	丘の公園第2遺跡出土石器
図版 3	丘の公園第1遺跡出土石器(1)		
図版 4	丘の公園第1遺跡出土石器(2)		

## I 調査に至る経緯

八ヶ岳南東麓にある高根町清里は、近年観光地として着目され、年間百数十万人もの観光客がおとずれている。この地域には、広大な県有林がある。こうした県有資産を効率的に開発し利用して県財政に資すると同時に、地域の発展にも貢献する目的で広域的な開発計画が立案された。県企業局による総合スポーツ・レクリエーション施設「丘の公園」の建設事業は、その一つである。建設工事は、第1期が昭和59年度から開始され、18ホールのゴルフ・コース、テニス・コート、グラウンド、レストハウスなどが建設され、昭和61年7月より運営を開始した。第2期工事で開発される「丘の公園」の北半地域は、昭和62年度より工事が着手されることになった。

「丘の公園」建設予定地域は、131haにものぼる広大な面積を有する。この地域は、古くから森林であり、木材利用のための伐採や植林が広域になされたことがあるが、畠地などとしての利用のため開墾されたことはなかったようである。したがって、埋蔵文化財の存否がまったく不明な地域であった。

しかし、戦後の入植・開墾の中で、「丘の公園」建設予定地に隣接する地域で、地元の研究者が縄文時代の土器を中心にして遺物を採集し、遺跡の存在が知られていた。また、先土器時代の遺跡集中地として名高い長野県の野辺山原とは、3kmほどの距離をおいて隣接しており、標高も1200m前後で、地形も近似していることから、10,000年を測る日本最古の時代、先土器時代の遺跡の存在も予想された。

そこで、県教育委員会は、遺跡の存在を確認すべく、「丘の公園」建設予定地と、これと同時に造成が進められる県林務部による別荘分譲地「清里の森」予定地域において、遺跡分布調査を行なった。調査は、文化財保存事業として国庫補助を受け、昭和58年度から昭和60年度まで、三次にわたって行なった。両地域は、林地であるため、試掘坑により遺構・遺物の有無を確認する作業を行なった。その結果、「丘の公園」地域では、先土器時代遺物の出土地点7カ所、縄文時代遺物の出土地点11カ所を確認した（山梨県教育委員会 1986）。

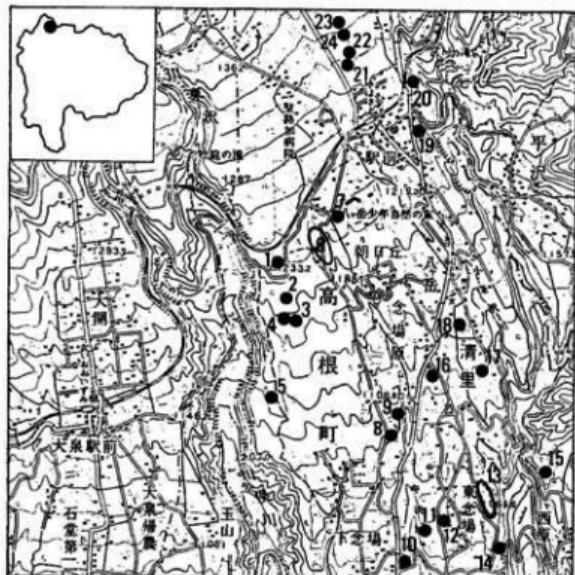
この遺跡分布調査では、25m間隔で試掘坑を設定したが、開発事業と埋蔵文化財保護との調整を行なうために、遺物の出土地点周辺にさらに細かく試掘坑を設定して遺物・遺構の分布の広がりを知る必要があった。そこで、第1期工事地域では、昭和59年度に、県企業局の委託を受けて、丘の公園14番ホール遺跡の範囲確認調査を行なった。その結果、先土器時代終末期の槍先形尖頭器を主体とする石器群の、直径30mほどの広がりをもつ遺跡を確認した。この遺跡は、ゴルフコースの一部設計変更により、全域が保存された。

第2期工事の対象地域には、分布調査で確認された遺物出土地点の大半がほぼ全域にわたって分布している。第2期工事着手に先立ち、埋蔵文化財を保護するため、あらかじめ遺跡範囲を確認し、建設が予定されるゴルフコースの設計段階で極力これを避けることが、県教育委員会と県企業局とで協議された。範囲確認調査は、対象地域が非常に広域のため、2次に分けて行なうこととした。本年度は、第1次調査として、遺物出土地点10カ所を範囲確認調査した。

これらの遺物出土地点について、当初は、近接するものを統合して、AからGの地点名を付けて仮称した。調査の結果、これらの地点はさらに統合され、4カ所の遺跡になることが判明した。そこで、これらの遺跡を丘の公園第1・2・3・4遺跡と呼称することとした。本来であれば、遺跡名に小字名を用いるべきであるが、本地域に小字名がないのでこう呼称することとした。

## II 調査組織

調査主体	山梨県教育委員会
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者	保坂康夫
作業員	小清水たか子、藤居治郎、栗林貴美江、小沢みよ子、小清水盛、藤谷昌子、宮井徹行、岡部正夫、中口勝功、重川恵美子、堀川ふじ、津金多嘉造、齊藤登美夫、抱江勝重、矢島啓子、利根川慶一、津金トメコ、税所晋次郎、堀川覚雄、津金はる江、東本千枝子、利根川かの子、藤居晃、堀川志き、長田光枝、利根川かず子、小林きやう、武井時政、堀川てるよ、高野俊彦、松下正彦、長田きのえ、長田元雄、榎本勝
協力機関	高根町教育委員会



1. 丘の公園第1遺跡
2. 丘の公園第2遺跡
3. 丘の公園第3遺跡
4. 丘の公園第4遺跡
5. 丘の公園14番ホール遺跡
6. 朝日ヶ丘遺跡B
7. 朝日ヶ丘遺跡A
8. 念場原C遺跡
9. 念場原D遺跡
10. 念場原G遺跡
11. 念場原H遺跡
12. 念場原I遺跡
13. 長原B遺跡
14. 篠鉢遺跡
15. 上深沢遺跡
16. 念場原E遺跡
17. 長原A遺跡
18. 念場原F遺跡
19. 念場原B遺跡
20. 念場原A遺跡
21. 清里の森第1遺跡
22. 清里の森第2遺跡
23. 清里の森第3遺跡
24. 清里の森第4遺跡

第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000)

### III 遺跡の位置と環境

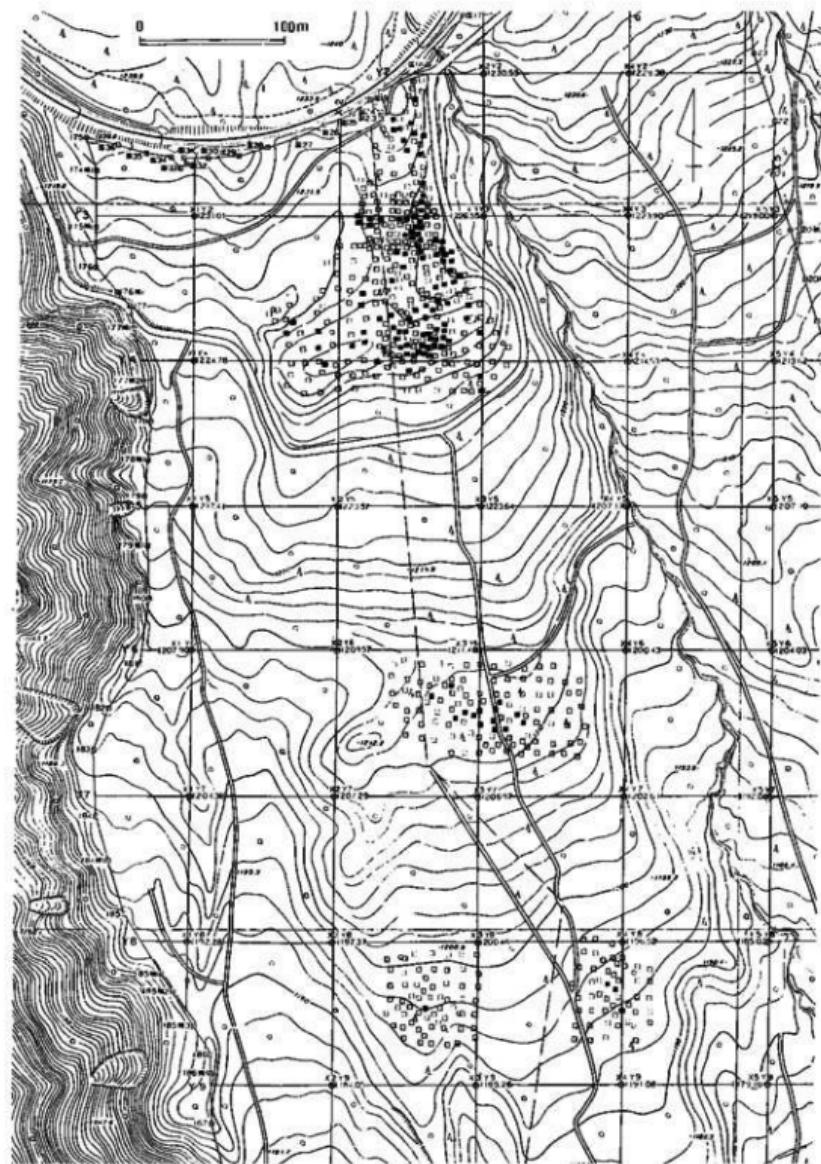
本調査を行なった「丘の公園」地域は、山梨県の北西部、八ヶ岳南東麓の北巨摩郡高根町清里にある。清里は、その中央を流れる大門川の深い谷によって、地形的に二分されている。大門川東岸には、山にコの字形に開まれた摩山地区と浅川地区がある。山地が迫まる両地域と違い、大門川西岸の念場地区は、八ヶ岳のゆるやかな裾野である。この地域は、西側で川俣川により開拓された100mにもおよぶ断崖で区切られ、東側も大門川の深い谷によって切られており、孤立した台地状を呈し、通称念場原と呼ばれている。「丘の公園」地域は、念場原の西端部の川俣川の崖線の肩部に位置する。標高は、1100m～1240mである。日本最高所を走る国鉄小海線の南側で、南北2km、東西1kmの広大な県有林内にある。

念場原の台地の基底部には、20～30万年前に八ヶ岳の大爆発によって山体が崩壊し堆積したとされる蘿崎岩屑流がみられる。その上位には、やはり山体崩壊による弘法坂礫層が堆積している。この両者で100m近い厚さである。最上部には、厚さ数mのローム層が乗る。その中には、鍵層として御岳山起源のPm-I（約8万年前）やPm-IV（約5万年前）が狭在する。ローム層の上位には、厚さ数十cmの黒色土層が覆い、表土となる。

念場原の地形は、基本的には、南北に細長く続くローム層よりなる高平坦地と、河川の流下する低地とによって構成される。高平坦地は、ローム層の平坦面が削られて形成されたものと思われ、平坦面がほとんど残存せず、やせ尾根状になった所もある。低地は、かなり平坦である。礫の露出が著しく、弘法坂礫層の上面が露出しているものと思われる。この低地は、北へゆくほど面積を増す。国鉄小海線より北側では、ほとんどが礫の露出する平坦面となり、ローム層も島状に残存しているのみのようである。

念場原は、標高1000mを越える高冷地であるが、昭和61年度に高根町教育委員会が行なった遺跡分布調査によって、かなりの数の遺跡が確認された。この中には、先土器時代の遺跡はなく、今回報告する丘の公園第1・2・3遺跡と丘の公園14番ホール遺跡のみである。縄文時代のものは多くみられる。第1図1・3・4・6～11・13～24がこの時代である。早期の押型文土器が最も古く、前・中・後期の土器がみられる。弥生時代の遺物は第1図6でみられるとのことである。また、この遺跡では、古墳時代前期のS字状口縁台付甕が表採されている。平安時代の上器は、第1図9・10・13・18で表採されたという。中・近世の土器も表採されており、第1図11・12・14・15・18でみられたという。特に第1図11で、運弁のある青磁片が確認されている（高根町教育委員会 1987）。

このように、本地域には先土器時代から連綿と遺跡が形成されているが、縄文時代創草期や晩期、弥生時代中期、古墳時代中・後期、奈良時代などの遺跡がみられず、断続的に居住されたと思われる。文献では、平安時代の三御牧の一つ、柏前牧の比定地となっている。また、中世に開墾され、念場千軒といわれるほどの繁栄を誇ったといわれる。中世の遺跡もかなりあることが確認され、考古学的にもこれが史実である可能性があるといえよう。また、遺跡は、高平坦地上に立地していることが読みとれる。



第2図 調査地域位置図 (1 : 4,000)

## IV 調査の方法と経過

調査は、昭和59年度の八ヶ岳東南麓遺跡分布調査によって確認された遺物・遺構出土地点について、その遺跡としての広がりを把握することを目的とした。遺物・遺構出土地点を中心に、 $1.5 \times 1.5\text{m}$  の試掘坑を  $5 \sim 10\text{m}$  間隔で設定した。

遺跡の境界を把握するため、遺物が出土した試掘坑周辺では  $5\text{ m}$  間隔で試掘坑を設定し、遺物が出土しない場合は、 $10\text{m}$  間隔で、遺物の出土した試掘坑から半径  $20 \sim 30\text{m}$  の範囲に試掘坑を設定して、遺物・遺構のないことを確認した。試掘坑は当初、分布調査時の出土地点を中心に、直径  $50\text{m}$  の範囲に設定した。また、遺跡の立地しそうな平坦地を中心に設定し、急傾斜地などは避けた。

試掘坑は、地表から人力で掘り下げた。特に細かな遺物を探すため、手がんなを用いて掘り下げた。試掘坑の深さは、ローム層を  $30\text{cm}$  程度まで掘り下げ、平均  $1\text{m}$  前後である。

試掘坑は、571カ所設定した。そのうち118カ所の試掘坑から遺物が出土した。

分布調査によって確認された10カ所について、近接するものを統合して、AからGまでの7カ所の地点について調査を行なったが、北側の3地点、中央の2地点は、連続する一つの遺跡であることが判明し、結果的に4カ所の遺跡を確認した。

最北端の遺跡は、南北約  $200\text{m}$  、東西  $30 \sim 150\text{m}$  で、面積約  $14,000\text{m}^2$  にもおよぶ巨大遺跡である。これを丘の公園第1遺跡とした。中央の遺跡は、南北約  $30\text{m}$  、東西約  $70\text{m}$  で、面積は約  $2,000\text{m}^2$  ほどの遺跡である。これを丘の公園第2遺跡とした。南端東側の遺跡は、南北約  $30\text{m}$  、東西約  $10\text{m}$  で、面積  $300\text{m}^2$  ほどの遺跡である。これを丘の公園第3遺跡とした。南端西側の遺跡では、1カ所の試掘坑のみで遺構が確認された遺跡で、丘の公園第4遺跡とした(第2図)。

調査は、昭和61年6月17日から昭和61年9月5日まで行なった。

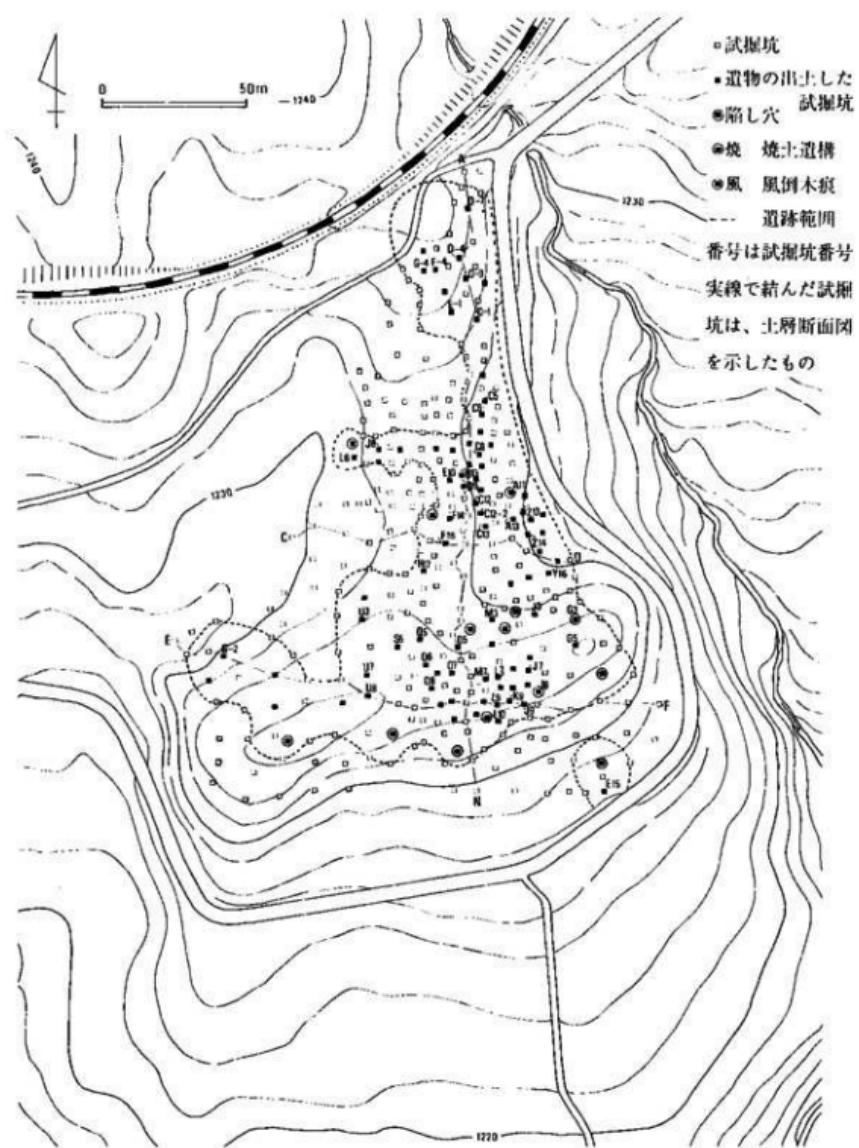
## V 調査の成果

### 丘の公園第1遺跡

#### 1. 試掘坑の配置(第3図)

試掘坑は、企業局が設定した  $100\text{m}$  方眼の座標杭およびその補助杭を基準にして設定した。昭和59年度の分布調査の際に、刺片が3カ所で出土し、陥れ穴が1カ所で確認されていたので、その地点を中心に、おおむね直径  $50\text{m}$  範囲に  $5\text{m}$  間隔で試掘坑を設定した。遺物は、その範囲以上に広がっていたが、遺物出土範囲についてはおおむね  $5\text{m}$  間隔で試掘坑を設定し、遺物・遺構がない地域では、おおむね  $10\text{m}$  間隔で設定した。後者の地域は、調査地域の西側と南側である。また、調査地域の東側については、道路によって切られている点や、道路より東側は、地形がかなり急傾斜になることから、遺跡の広がりはないものと判断し、試掘坑を設定しなかった。

なお、第3図に試掘坑の配置状況を示した。図中の黒の四角が遺物・遺構の出土した試掘坑、白ヌキの四角が遺物・遺構の出土しなかった試掘坑である。一部の試掘坑に付した番号は、そ



第3図 丘の公園第1遺跡試掘坑配置状況および遺跡範囲図 (1 : 2,000)

の試掘坑の番号で、遺物・遺構の説明の際に用いる試掘坑番号と符合する。実線で結ばれた試掘坑は、土層断面図を第4図に示した試掘坑であり、その列の両端に示したアルファベットは第4図の土層断面図の列の始点と終点を示すアルファベットと符合する。また、破線は遺跡の範囲を示す。

なお、第3図の地形図は2mコンタであり、部分的に1mの補助コンタが入る。

## 2. 遺跡周辺の地形

本地域は、「丘の公園」の最高所にある。標高1,228~1,234mである。遺跡の東側に河川があり、それによって開析された急斜面が南北に続く。南側は東西に連なる小高い丘状になっている。その北側はほとんど傾斜のない平坦地が広がっている。小高い丘状の地域の南側は、約100mほど緩傾斜面が続き、丘の公園第2遺跡の北側で急斜面に変換する。遺跡西側では、河川により開析されたと思われる急斜面があるが、小高い丘状の地域北側の平坦地の西側では、南北方向に開口する緩傾斜の小浅谷がみられる。遺跡北側では、平坦地に続き再び傾斜がみられるようになるが、北側より伸びる舌状の地形である。こうした舌状の地形が、この西側にもみられる。

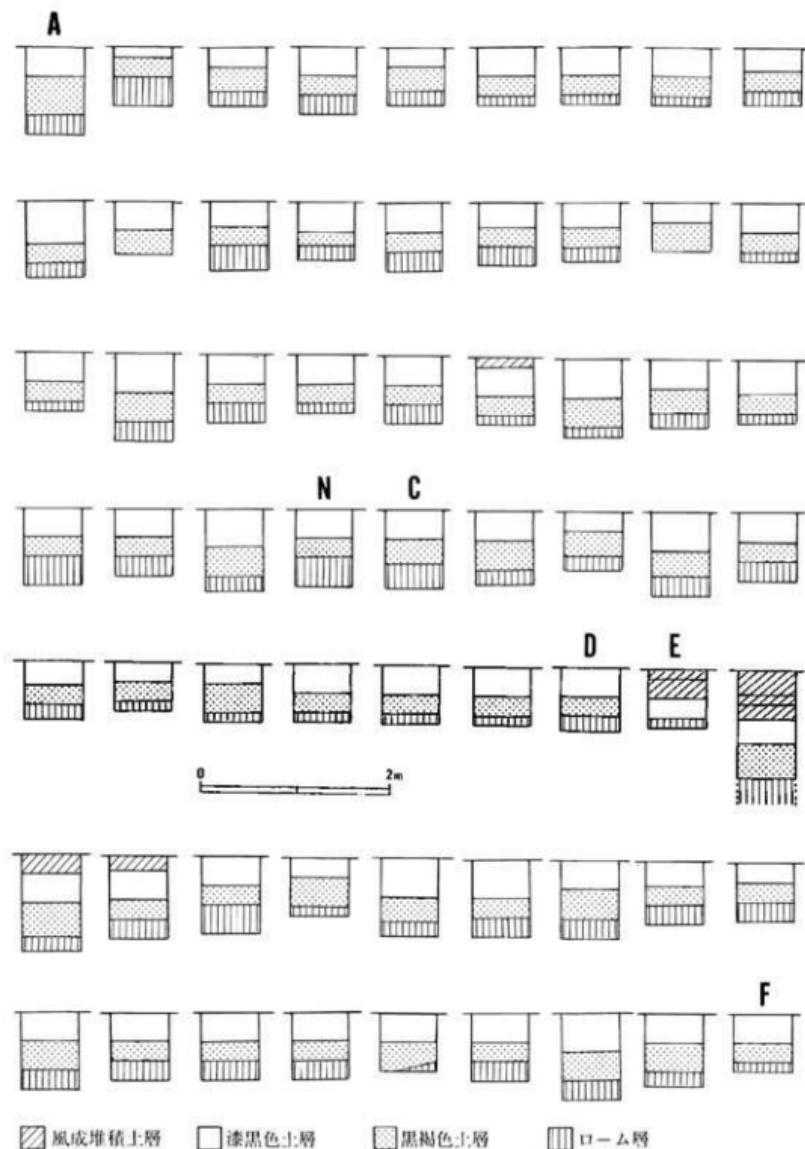
三方を急傾斜地で囲まれ、南側に東西に細長い小高い丘状の地域があり、中央が非常に平坦で、その西側に南北方向に傾斜する小浅谷をもつといった地形は、「丘の公園」地域内では稀である。丘の公園第2遺跡の立地する地形は、これを小規模にしたような地形であり、こうした地形が二段になって連なっている。こうした特殊地形がどのようにして形成されたか、今後十分検討する必要がある。

遺跡は、舌状の地形の南端から、平坦面、小高い丘状の地形の全体にわたって分布している。特に、平坦面中央東側と、小高い丘状の地形の中央に濃い遺物の分布がみられる。

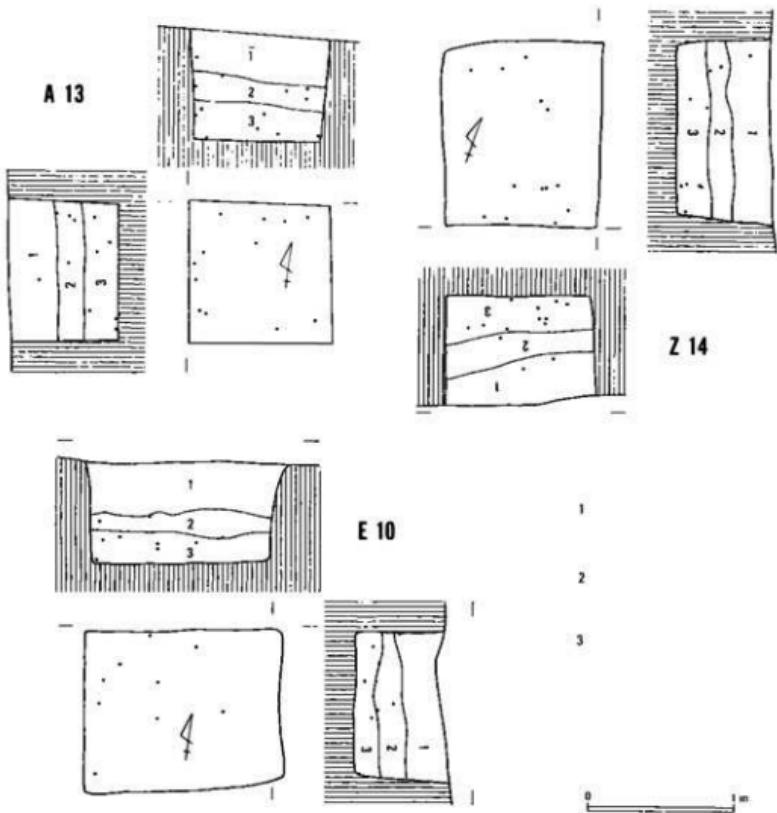
## 3. 層序

第4図に一部の試掘坑の土層断面図を示した。土層断面図は、第3図内で実線で結んだ試掘坑の配列順序どおりに配列した。アルファベットの付された土層断面図が始点と終点であり、第3図のアルファベットの付された試掘坑と符合する。A・C・Eが始点で、N・D・Fが終点である。

土層は、基本的に黒色土層とローム層とからなる。黒色土層は、上層の漆黒色土層と、下層の黒褐色土層とに分かれ。漆黒色土層は、下層にくらべ非常に軟質である。上部に数cmの腐植層が覆う。黒褐色土層は、上層より硬質である。上層との境界は波状をなすが、硬度の違いによって比較的明瞭に区分ができる。黒褐色土層の下部は数cmから20cmほどのローム層との漸移層がみられる。漸移層は、暗褐色であるが、黒色土層に近い部分ほど黒い。また、ローム小ブロックを含む場合もある。上層にくらべ軟質であるが、漆黒色土層よりも粘性に富む。最下層のローム層は、軟質なソフトローム層である。明褐色を呈し、非常に粘性に富む。特殊な土層であるが、最上層に風成堆積土層がみられる場合がある。暗褐色の非常に軟質な土層である。黒褐色を呈するバンドが入る場合もある。この土層は、「丘の公園」地域の西側の、川俣川崖線に沿った幅300mほどの地域に帶状に分布し、高平坦地の西側肩部では、2~3mの土壌状の



第4図 丘の公園第1遺跡土層断面図



第5図 丘の公園第1遺跡出土状況図

高まりを形成している。

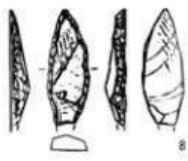
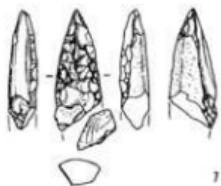
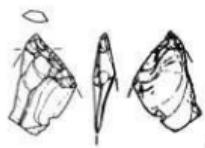
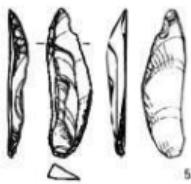
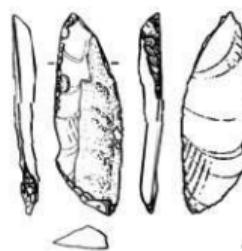
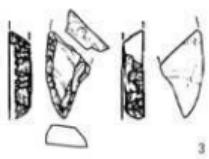
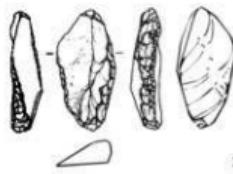
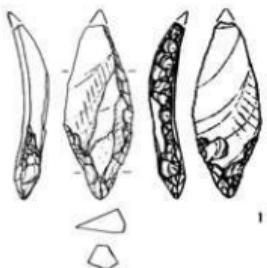
第5図に、先土器時代の遺物出土状況を示した。最も多くの遺物を出土した試掘坑を示した。遺物は、ローム層中に分布するが、かなりの量の遺物が黒色土層中からも出土している。

#### 4. 遺構

遺構としては、陥し穴を11カ所確認した。このうち1カ所は、昭和59年度の分布調査で確認したものである。今回は、ローム層上面でのプラン確認にとどめ、形態等を把握するには至っていない。その分布をみると、遺跡南部の小高い丘状の地域に集中している。

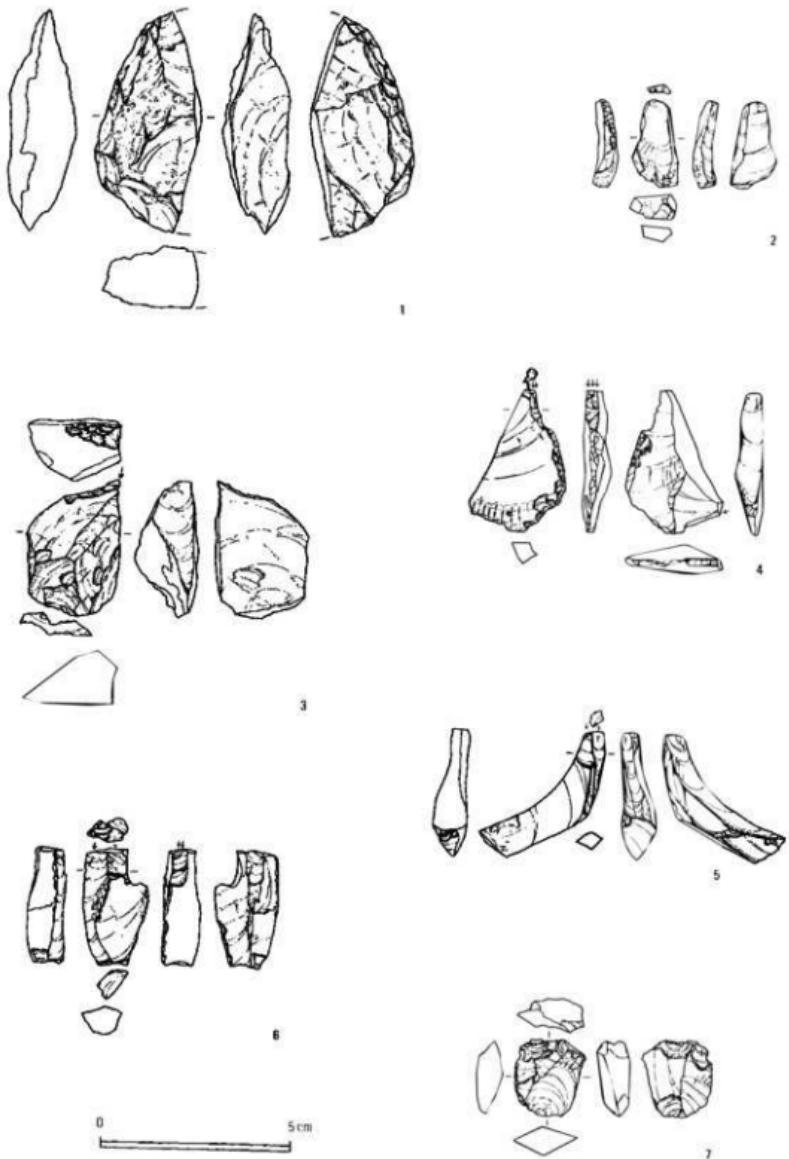
他に、焼土遺構がある。黒色土層下部の黒褐色土層中にみられた。

また、風倒木痕と思われる落ち込みを2カ所で確認した。陥し穴と違い、土層中に特異な土層やロームブロックがみられた。ある程度掘り下げて、住居址など他の遺構の可能性も追究したが、遺物の出土も稀で、床面もなく、そうした可能性は考えられなかった。

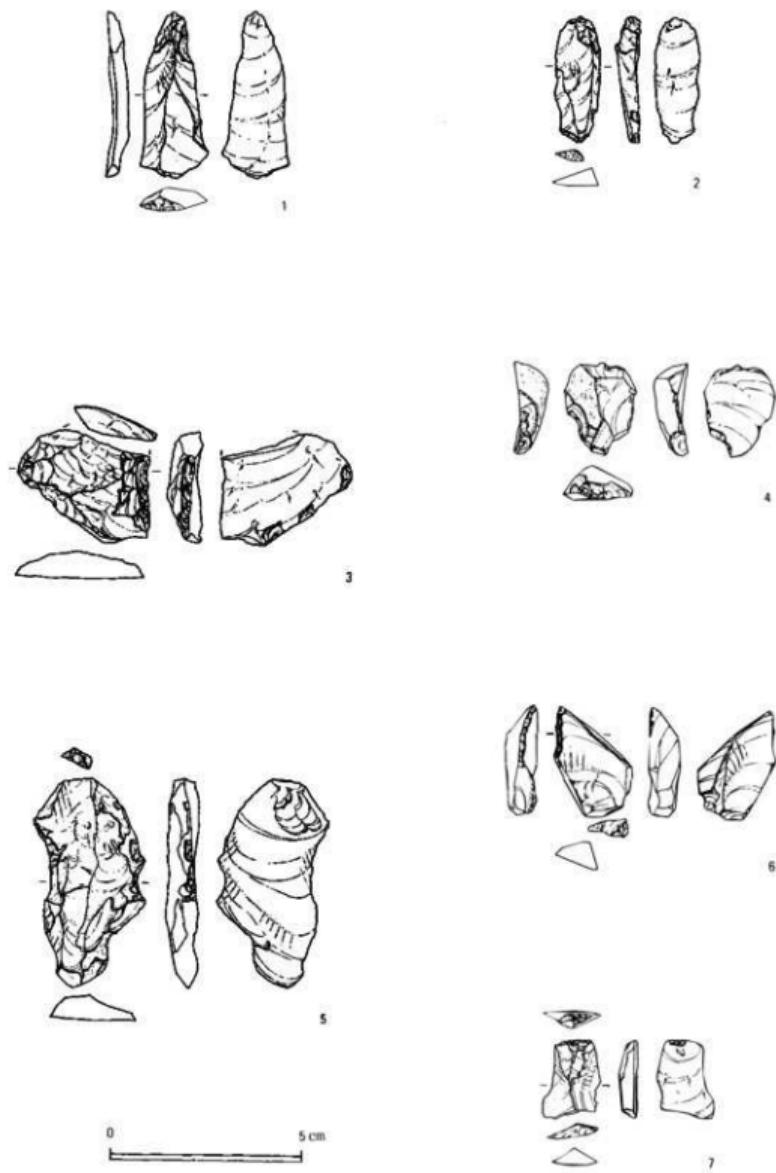


0 5 cm

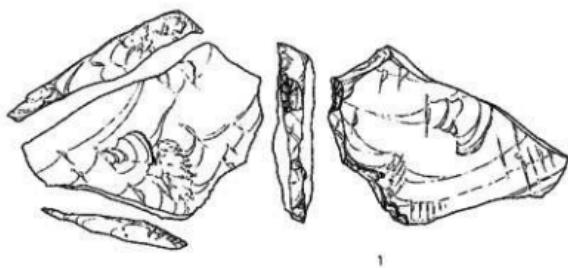
第6図 丘の公園第1遺跡出土石器（1）



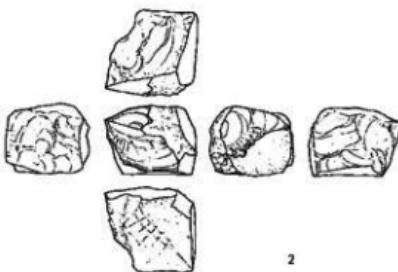
第7図 丘の公園第1遺跡出土石器 (2)



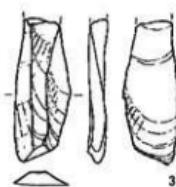
第8図 丘の公園第1遺跡出土石器 (3)



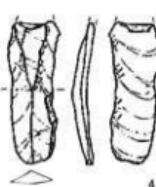
1



2



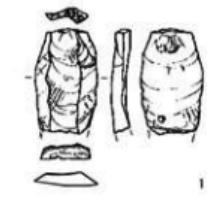
3



4



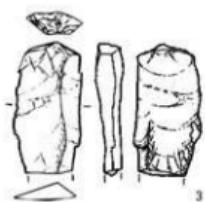
第9図 丘の公園第1遺跡出土石器（4）



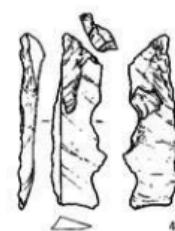
1



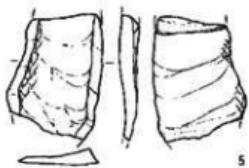
2



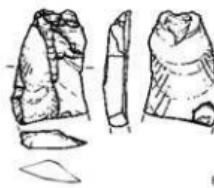
3



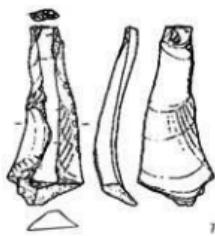
4



5

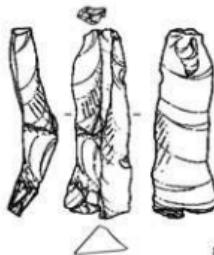


6



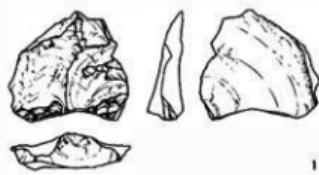
7

0 5 cm

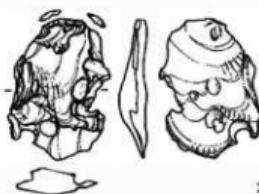


8

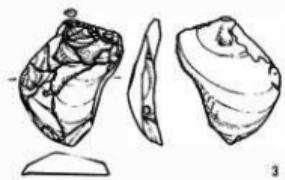
第10図 丘の公園第1遺跡出土石器（5）



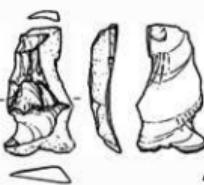
1



2



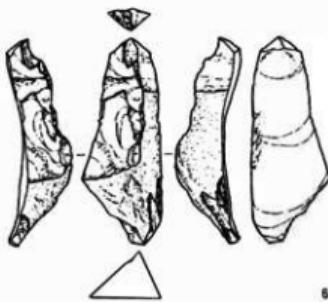
3



4



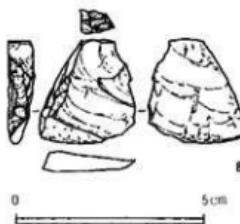
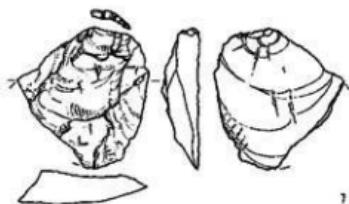
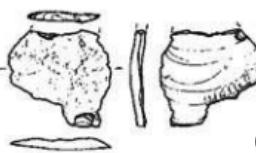
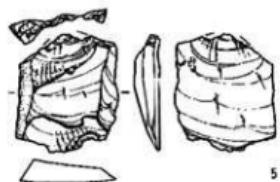
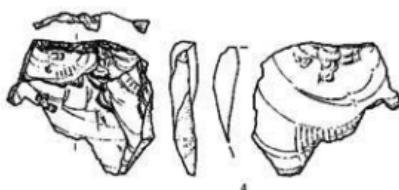
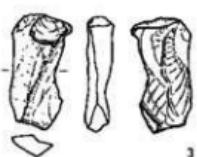
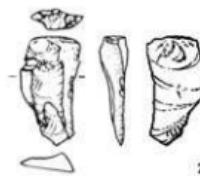
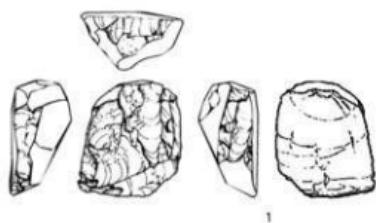
5



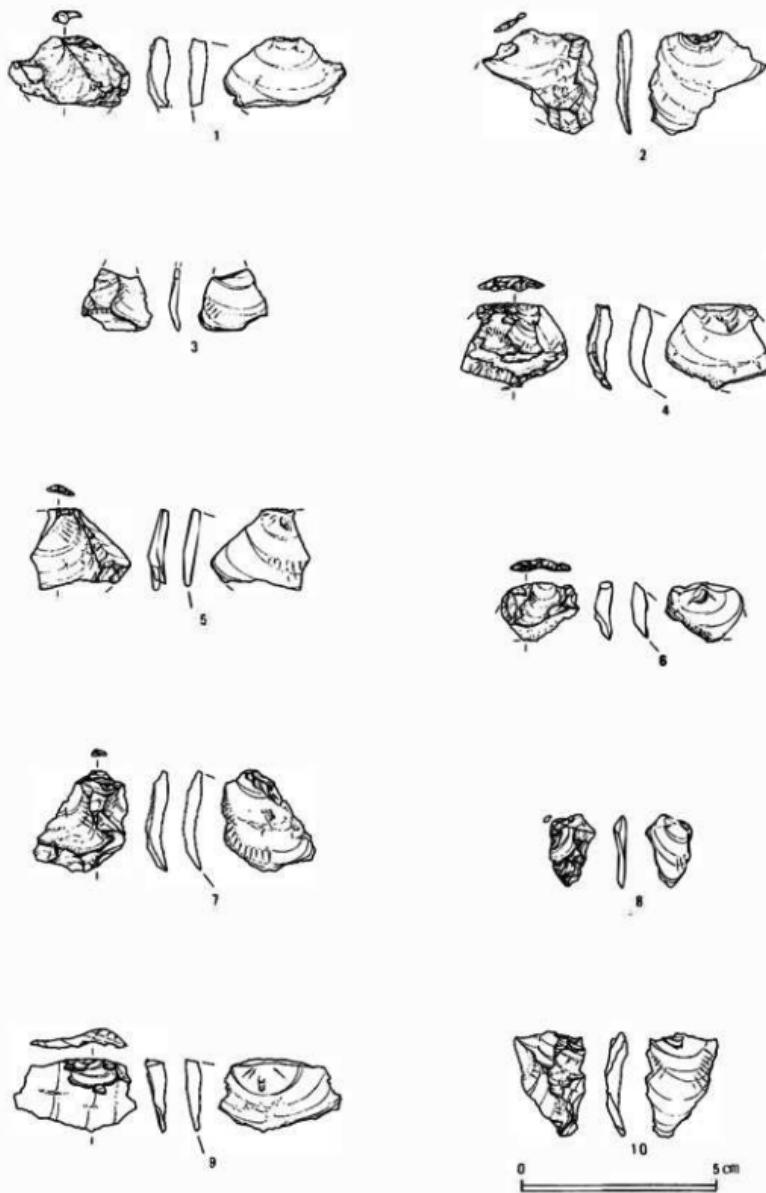
6



第11図 丘の公園第1遺跡出土石器 (6)



第12図 丘の公園第1遺跡出土石器（7）



第13図 丘の公園第1遺跡出土石器 (8)

## 5. 遺物

### a 先土器時代の遺物（第6～13図）

丘の公園第1遺跡では、348カ所の試掘坑を設定し掘り下げたが、そのうち76カ所から先土器時代と思われる石器や剥片などが出土地した。出土した総点数は、203点である。石器の器種は、ナイフ形石器5点、槍先形尖頭器4点、彫器5点、楔形石器1点、削器1点、二次加工ある剥片7点、石核1点である。剥片は、179点あり、ほとんどが石刀を含む縦長剥片であり、小量ながら打面調整剥片や稜形成剥片などの石核調整剥片を含む。また、3カ所の試掘坑から、槍先形尖頭器の製作時に出たと思われる、いわゆるポイント・フレイクが出土している。

ナイフ形石器（第6図1～5） 第6図1は、いわゆる二側縁加工のナイフ形石器である。先端部が試掘調査時に欠損した。素材の打面側を先端とし、右側縁を先端から基部へ全体に、左側縁を基部のみ刃潰し加工を行なっている。先端部から8mmほどの区間で、正面側よりの剥離、いわゆる稜上加撃ないしは対向剥離がなされている。この剥離は、裏面側よりの刃潰し加工の後に行なわれている。この部分を含め、先端側の縁辺には、非常に細かな剥離が連続する。基部側には、刃潰し加工としては比較的大きな剥離が連続する。基部の加工は、両縁とも、基部端より6mmほどのところに加撃点が集中し、あたかも基部に両側から抉りを入れるような加工である。基部裏面には、両縁側から平坦な剥離がなされている。裏面の右縁側の剥離と、左縁側上方の加工は、正面の剥離よりも新しいが、左縁側下方の剥離は古い。素材は石刀と思われる。正・裏面とも同方向の剥離がみられる。一部に自然面が残存する。石材は黒色のシマに入る黒曜石である。試掘坑番号J 9より出土。

2は、二側縁加工のナイフ形石器である。素材の打面側を先端にしている。刃潰し加工が先端部にもなされているよううにみえるが、使用時の剥離かもしれない。基部端はやや丸く仕上げられている。基部裏面には、平坦な剥離が一枚みられる。裏面加工であろう。素材は石刀と思われ、正面側には、主剥離面と同方向の剥離が多いが、逆方向のものが一枚だけ残存する。正面の剥離の中で最も古い。石材は、黒曜石である。C 12の試掘坑から出土。

3は、二側縁加工のナイフ形石器で、基部のみが残存している。右側縁が抉るように加工されており、刃部は右側縁側にあったものと思われる。基部端はかなり尖るよう加工されている。裏面加工はみられない。石材は、メノー質のチャートである。C 12の試掘坑から出土。

4は、素材の打面側をちぎり切るように加工した、いわゆる部分加工のナイフ形石器である。先端がかなり尖るよう加工されている。また、基部側にも若干の加工がみられ、全体が平行四辺形に仕上げられている。刃部正面先端側に、使用痕と思われる微細剥離が連続する。素材は石刀で、自然面が大きく残存する。石材は、黒曜石。A 11の試掘坑から出土。

5は、部分加工のナイフ形石器である。素材の末端に浅い加工がなされている。先端がかなり尖る。先端裏面には、使用痕と思われる剥離がみられる。基部にも非常に微細な加工がみられる。特に左側縁側と右側縁側の先端側の剥離は、使用痕の可能性が考えられるほど微細である。素材は石刀で、石核腹面調整が主剥離面の作業面側を打面とした剥片剥離面がみられる。石材は、透明度の高い黒曜石。D - 3 の試掘坑から出土。

槍先形尖頭器（第6図6～8、第7図1）6は、槍先形尖頭器の先端を含むポイント・フレイクである。正面は右縁から剥離のみがみられる。裏面も右縁からの剥離が目立つ。本剥片も、正面右縁を加工中に生じたものである。シルト岩製。C 8の試掘坑内出土。

7は、両面加工の槍先形尖頭器である。基部側を、おそらく製作時に欠損している。正面は、両縁部からの加工によりほぼ全面に加工されている。基部側に若干の自然面が残存する。裏面には素材の剥離面および自然面が大きく残存し、加工は部分的である。先端左縁側と、基部右縁側に若干みられるのみである。欠損の原因となった剥離は、裏面基部に加工しようとしたものらしい。黒曜石製。H 17試掘坑より出土。

8は、周辺加工の槍先形尖頭器である。基部端を試掘調査時に欠損している。剥片素材の打面側を先端にして、刃潰し加工状の急斜な加工で周辺を調整している。裏面には加工がみられない。正面には自然面が残存する。黒曜石製。A 13の試掘坑出土。なお、本試掘坑より、多くのポイント・フレイクが出土しており、その一部を第13図に示した。

第7図1は、両面加工の槍先形尖頭器と思われる。部厚い木葉形尖頭器の欠損品と思われるが、基部の丸い大形の尖頭器の一部の可能性もある。正面の加工は比較的急斜で大きい。中央に素材時と思われる剥離が残存する。裏面の加工は非常に平坦で、縁辺に細かな剥離が連続する。断面がD字形になるものと思われる。安山岩製。E 10試掘坑より出土。

彫器（第7図2～6）2は、素材の打面側より、素材の縁部に沿って桶状剥離を行なった彫器と思われる。打面部に何枚かの小剥離がみられるが、素材打面部が非常に薄く、あるいはこれらの剥離が本剥片剥離時の打面破碎によって生じ、桶状剥離もこの時生じたものである可能性も捨てがたい。正面左縁側には、石核腹面調整か剥片剥離作業面の頭部と思われる剥離が連続する。黒曜石製。M 7試掘坑より出土。

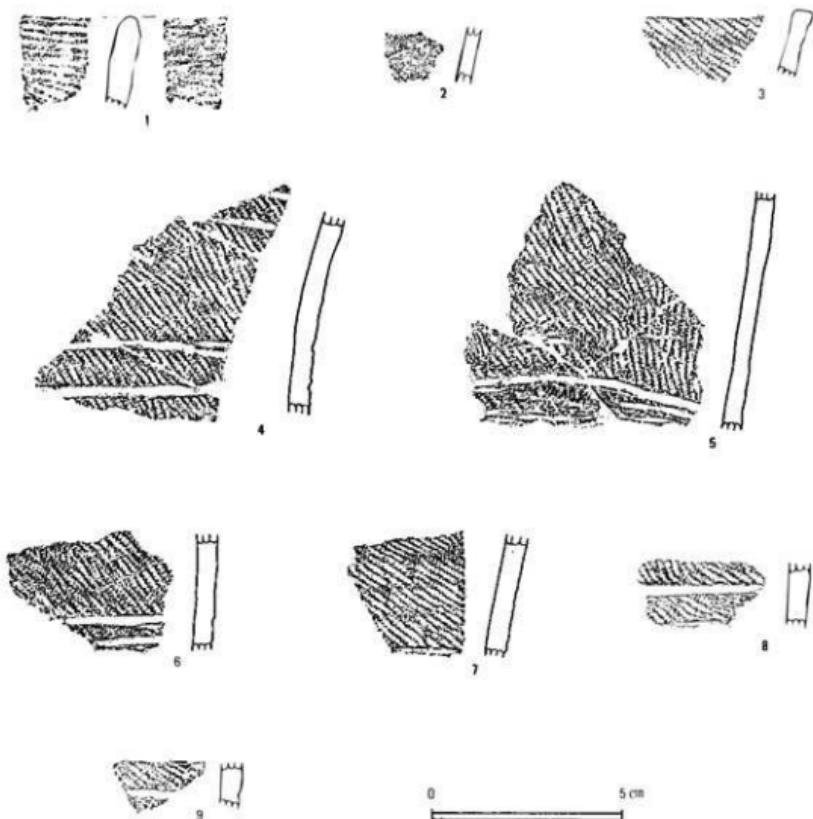
3は、素材末端部に細かな剥離によって打面を作出し、素材縁辺に沿って桶状剥離を行なったものである。素材は非常に部厚い、チャートの剥片である。C 12試掘坑出土。

4は、素材の折れ面を打面としているものと思われ、素材縁辺に沿って桶状剥離を何回かくりかえしている。本石器はその打面から剥離された削片である。その削片末端に小規模な打面を作出し、小規模の桶状剥離を行ない、彫器として再利用している。石器縁辺には二次加工がみられる。また、旧桶状剥離面に平行して、正面の二次加工周辺に線状痕がみられる。また、裏面には稜の潰れ痕が目立つ。黒曜石製。U 9試掘坑出土。

6は、素材の打面を利用して素材縁辺に桶状剥離を何回かくりかえしたものである。正面左側の剥離が最も長いが、素材主剥離面側にかなり寝ている。右側の剥離は非常に深い。縁辺に使用痕と思われる微細剥離が連続する。シルト岩製。O 5試掘坑より出土。

7は、削片である。打面は小さく残存するのみで、一枚の剥離面であるが、素材主剥離面側からの加撃で、打点も近く、素材末端を加工し作出したものと思われる。桶状剥離はやはり素材縁辺に沿ったものと思われる。末端に二次加工がある。黒曜石製。A 11試掘坑出土。

楔形石器（第7図7）剥片の両端から同時に加撃されたもので、裏面左側に素材の剥離面が残存するものの、形状を整形したような剥離はみられない。チャート製。S 5試掘坑出土。



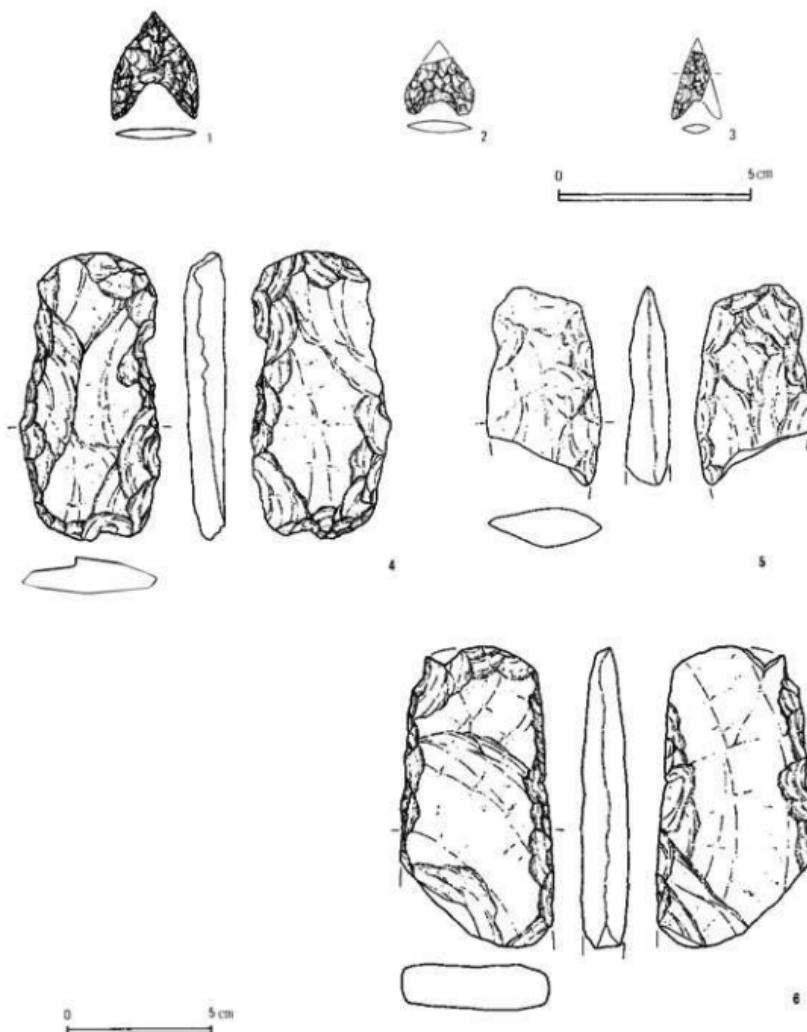
第14図 丘の公園第1遺跡出土土器（1）

削器（第8図3）正面右縁に非常に平坦な剥離と、やや急斜な剥離とが連続して2段にわたってみられ、直線的な刃部を形成している。黒曜石製。D10試掘坑出土。

二次加工ある剥片（第8図1・2・4～7、第9図1）第8図1・2は、石刀素材の末端に若干の二次加工を行なったものである。いずれも小規模で、素材が薄く脆弱で、搔器とはしがたい。1はシルト製、L10出土。2はチャート製、U3出土。4は素材の打面側の両縁部に抉るような剥離を行ない、両者の間に細かな加工で正面左側に傾斜した刃部を作出したものである。チャート製、U7出土。5は、縦長剥片の両縁のはば中央に加工したもので、左縁のものはやや弯曲し、右縁のものは抉るように弧状である。黒曜石製、J9出土。6は、素材の末端の尖った部分を使用したかのように、一部に微細な剥離がみられる。黒曜石製、O7出土。7は、素材の打面側を若干加工したもので、1・2に似る。黒曜石製、F4出土。第9図1は、



第15図 丘の公園第1遺跡出土土器（2）



第16図 丘の公園第1遺跡出土:縄文時代石器

大型の剥片を切断し、一部に二次加工を行なっている。黒曜石製。風化があまり進んでおらず、縄文時代のもの可能性もある。G-2出土。

石核（第9図2） サイクロ状の原石の一部を若干剥離したものである。ほとんどの原石のままである。黒曜石製。K-9出土。

剥片（第9図3・4、第10~13図） 第9図3・4、第10図は石刃である。打面が残存する

ものは、いずれも打面細部調整がなされている。正面の剥片剥離作業は、いずれも主剥離面と同一方向である。第10図7・8には、それぞれ一枚ずつ、石核腹面調整と思われる剥離がみられる。石材は、第9図3、第10図1・6～8が黒曜石、第9図4、第10図2がチャート、第10図3・5がシルト岩、第10図4が水晶である。出土試掘坑は、第9図3がA11、4がC13、第10図1がJ3、2がZ12、3がF16、4がA13、5がQ5、6がZ13、7がJ9、8がL7。

第11図1～3が打面調整剥片、6が稜形成剥片、4が石核腹面調整のみられる剥片、5が両設打面の明らかな剥片である。石材は1がチャート、6がシルト岩で、他は黒曜石。出土試掘坑は、1がC-1、2がJ7、3がQ6、4がJ9、6がA11、7がF14である。

第12図はさまざまな技術的要素をもつ剥片である。1は剥片剥離作業面を打面とし、打面を90度転移しながら作業をくりかえす技法的要素をもつ。3・4は正面に広く自然面を残し、剥離作業当初のものと思われる。2・8は打面細部調整がある小剥片。4・5は単剥離打面で四角の厚い剥片。7は求心的な剥離作業を思わせる剥片である。石材は8がチャートで、他は黒曜石である。出土試掘坑は、1がD-4、2がJ9、3がL9、4がQ8、5がC6、6がI8、7がD11、8がM3である。

第13図は、槍先形尖頭器製作過程でたる剥片と思われる。いずれも寸ずまりで薄く、かなり弯曲する。正面に主剥離方向とは逆の剥離がみられるものがある。比較的細かな剥離をくりかえす。剥離角がなく鋭角である。打面が小さく、破碎するものもある。特に8は、先端部付近の、9はかなり初期の加工段階のものと思われる。全て黒曜石である。出土試掘坑は、1～3がA13、4～6がZ14、7～10がY16である。こうした試掘坑からは剥片の出土が特に多く、A13からは、第6図8の槍先形尖頭器も出土している。

#### b 縄文時代の遺物（第14～16図）

土器（第14・15図） 第14図1は貝殻による条痕のある土器である。裏面は条痕がかなりなでられて不鮮明である。纖維は含まないが、白色粒子を比較的多く含む。縄文時代早期末の条痕文土器である。出土した試掘坑は、G5である。2は、幅5mmほどの幅広で浅い半截竹管による沈線と、同工具の端部による刺突文が残存する。胎土には金雲母が非常に多い。縄文時代前期末の土器と思われる。C5試掘坑出土。3～9は、縄文地文に、2本を単位とした沈線を少なくとも2段めぐらしている。3は口縁であるが、口唇部がきれいに磨かれ、波状をなしているらしい。縄文時代中期の藤内期のものと思われる。J8出土。第15図1・2は、非常に薄く、縄文と沈線による文様で、沈線部はよく磨かれ、三本並行することが多い。擦消縄文がみられる。G4出土。2～9は、口縁端部が上方へ突出する小型の壺形土器である。頸部に沈線が1本めぐり、それ以下に沈線による曲線文様がみられる。G3出土。10・11は、2本を単位とする沈線がみられる。10は貼付文がみられ、中央がややくぼむ。貼付文より左右の斜め下方と横方向に沈線がみられる。G3出土。12はやや薄手の沈線のみられるものである。G3出土。13～22は無文の粗製土器である。G3出土。第15図のものはすべて縄文時代後期である。

石器（第16図） 1～3は黒曜石製の石鎌である。1はE15、2はD-7、3はE-1出土。4～6は粘板岩製の打製石斧である。4はJ8、5・6はL8出土。

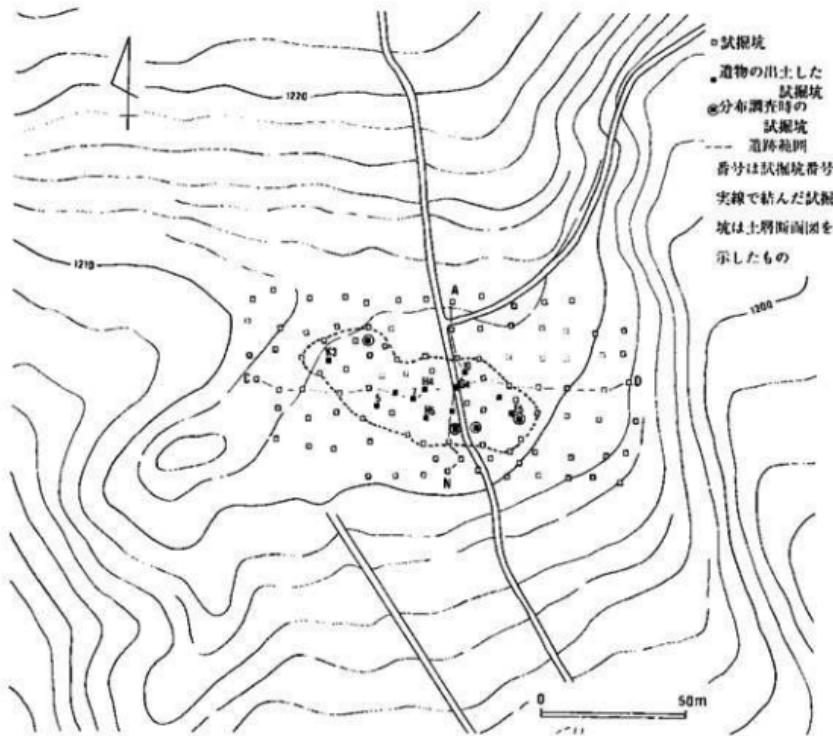
## 丘の公園第2遺跡

### 1. 試掘坑の配置 (第17図)

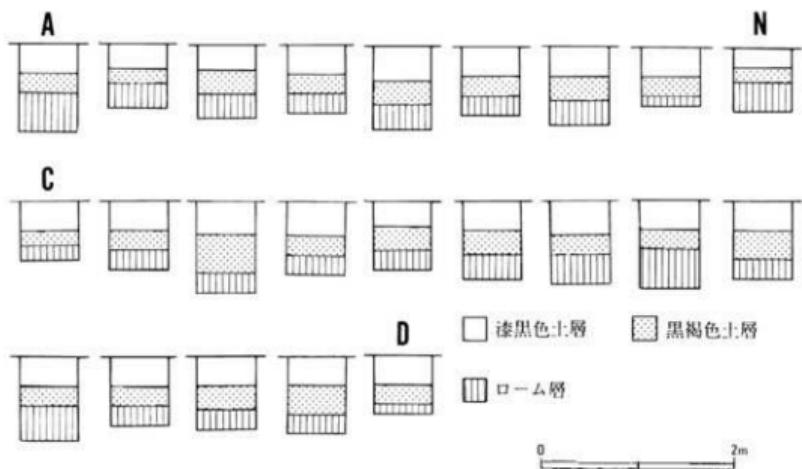
試掘坑は、企業局が設定した100m方眼の座標杭およびその補助杭を基準にして設定した。昭和59年度の分布調査の際に、4カ所の試掘坑から刺片が出土し、そのうち2カ所は陥し穴も存在していた。これらの出土地点は2地点に分けられるが、立地する地形が、南北約100m、東西約150mの非常に平坦なテラス状の地形である。遺跡はこの地形全体に広がる可能性があったので、この地形全体をはさむようにまず10m間隔で試掘坑を設定し、遺物・遺構が出土した試掘坑ではさらに周辺に5m間隔で試掘坑を設定して、遺物・遺構の広がりを確認した。

### 2. 遺跡周辺の地形

本地域は、ほとんど傾斜のない平坦地である。東側は急斜面で囲まれている。河川との比高は8m程度であり、斜面は植生が覆っている。南側はやや急な斜面で、幅30mほどであり、「丘の公園」地域で一般的な緩斜面に連続する。また、平坦面南端部は微妙な高まりとなっており、東西に連続する。その西端には比高1m程度のコブ状の高まりがある。平坦面の西側も



第17図 丘の公園第2遺跡試掘坑配置図 (1 : 4,000)



第18図 丘の公園第2遺跡土層断面図

急斜面で画されるが、平坦面の北西隅から南西方向へ小浅谷があるが、この部分はやや緩傾斜である。北側は、丘の公園第1遺跡方向から下ってきた急斜面によって画されている。

こうした地形は、丘の公園第1遺跡の立地する地形とかなり近似する。規模は小さいが、ほぼ相似形であると言える。こうした地形は「丘の公園」地域では稀であり、どのように形成されたものか今後検討する必要がある。

遺跡は、平坦面のほぼ中央を占拠している。本地域では稀な地形に大型の先土器時代遺跡が立地している点注目される。

### 3. 層序

第18図に一部の試掘坑の土層断面図を示した。土層断面図は、第17図中に実線で結んだ試掘坑の配列順序どおりに配列した。アルファベットの付された土層断面図が始点と終点であり、第17図中のアルファベットの付された試掘坑と符合する。A・Cが始点で、N・Dが終点である。

土層は、基本的には黒色土層とローム層とからなる。最上位にしばしばみられる風成堆積土層は、本地域にはみられなかった。黒色土層は、上層の漆黒色土層と下層の黒褐色土層とに分かれる。その性質は丘の公園第1遺跡と同様である。ローム層も同遺跡と同様である。

それぞれの層の厚さは、漆黒色土層が20~40cmで30cm程度が多い。黒褐色土層は10~40cmで25cm程度が多い。ローム層はソフトローム層の上面から数十cm下位にハードローム層があるはずであるが、今回はそこまで掘り下げなかった。

遺物は黒色土層中より出土したものもあるが、多くはローム層中より出土した。最も深いものは、ローム層上面より約40cmほど下位より出土している。黒色土層中のものは、ローム層中のものが浮きあがったものと思われる。

#### 4. 遺物（第19・20図）

本遺跡からは、昭和59年度の分布調査の際に、陥し穴2基が確認されている。しかし、今回の調査では、こうした遺構はまったく確認できなかった。

出土遺物は、111カ所設定した試掘坑のうち11カ所で確認した。すべて先土器時代のものと思われる。出土総点数は17点である。石器の器種は、ナイフ形石器1点、二次加工ある剥片1点、石核2点、剥片13点である。

ナイフ形石器（第19図1） いわゆる部分加工のナイフ形石器である。先端部および基部を欠損している。素材の末端部に断ち切るように刃潰し加工を行なっている。素材は石刀である。素材の打面部は欠損しているが、折り取られている可能性がある。素材正面にみられる剥離面の剥離方向は、主剥離面の剥離方向と同一のものばかりである。石材は黒曜石である。出土した試掘坑は、H 4である。

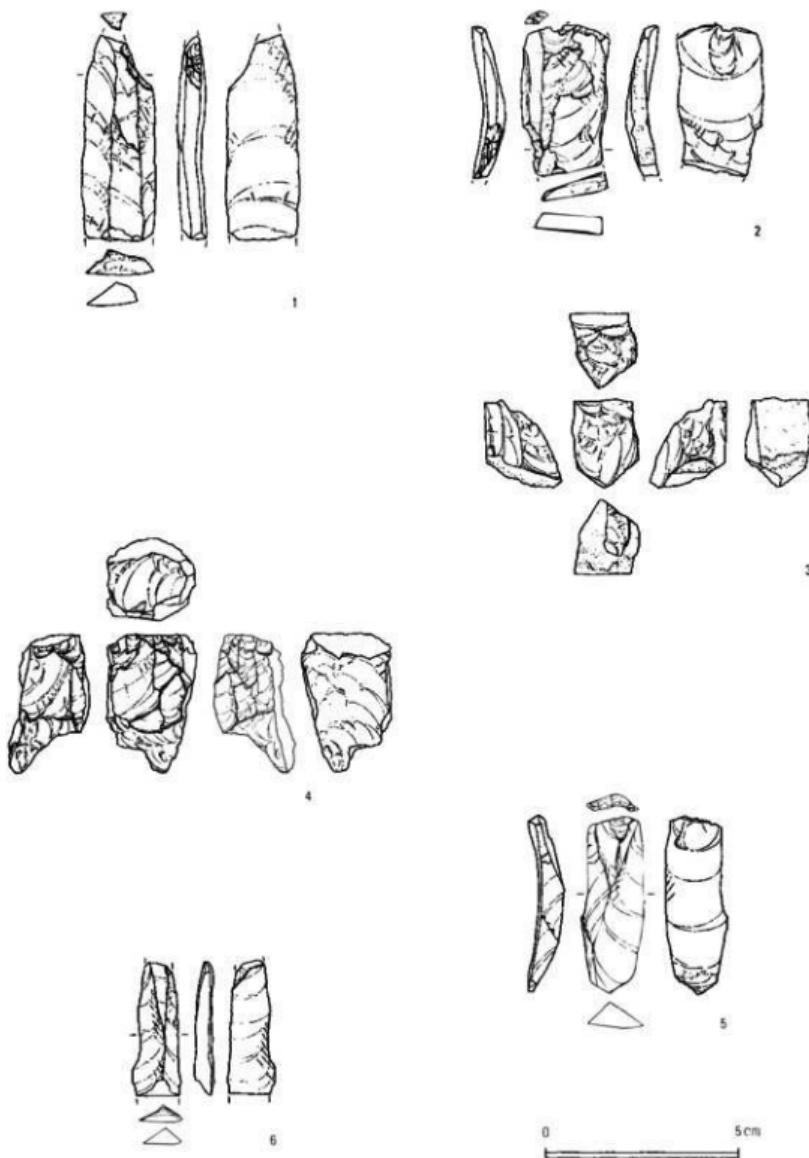
二次加工ある剥片（第19図2） 素材の左縁の末端部に若干の二次加工がみられる。加工は、裏面より行なわれている。素材の末端は折れており、二次加工の剥離のうち折れ面に接する一枚の小剥離を折れ面が切っているらしい。素材は継長剥片で、右縁部は自然面である。打面部はほとんど破碎したり、調査時に欠損しているが、残存した打面は細部調整が行なわれている。素材正面の剥離は、主剥離面の剥離方向と同一のものばかりである。石材は黒曜石である。出土した試掘坑は、K 3の試掘坑である。

石核（第19図3・4） 3は、5面に剥離面がみられ、1面が自然面である。いずれの剥離面も剥片剥離作業を行なったようなものではなく、おそらく原石の分割時のものであると思われる。黒曜石製である。5の試掘坑から出土。

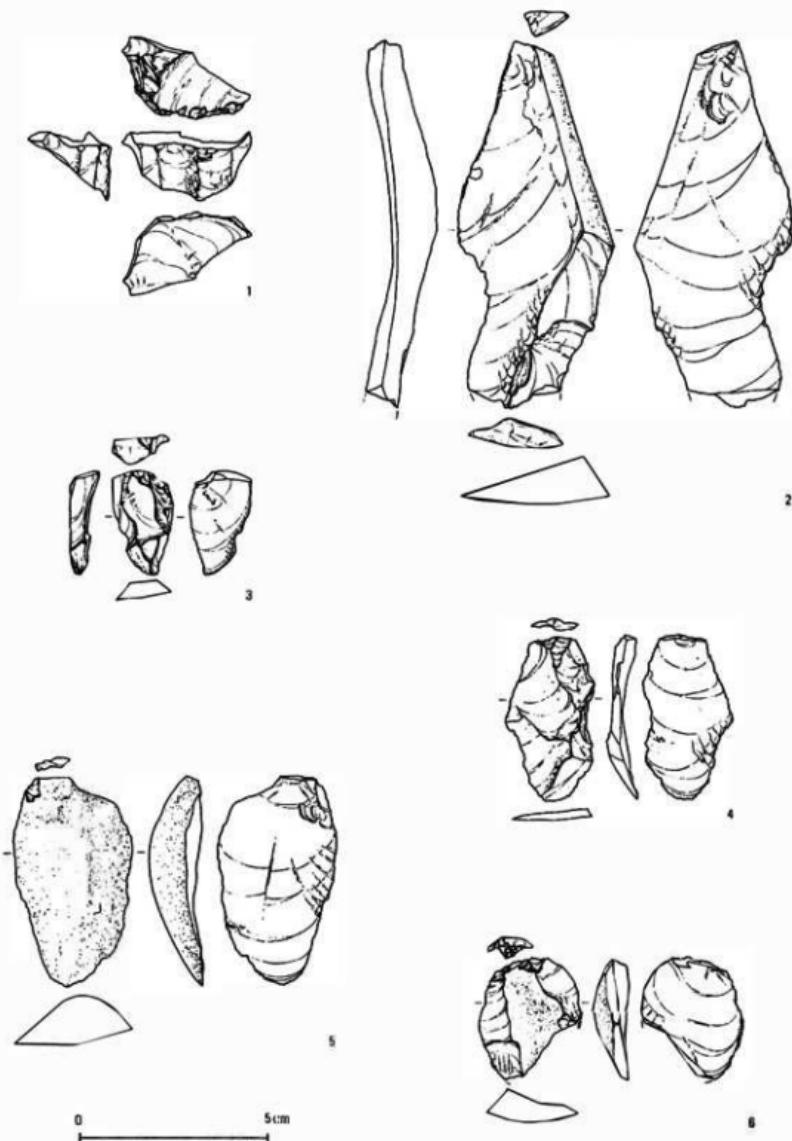
4は、継長の小型の剥片を剥離した石核である。打面は単剥離打面で、石核正面の右方向から、剥離作業面に対してやや傾斜をもつように作出されている。この剥離の打点部は、剥片剥離作業面の剥離によって取られている。裏面は、一枚のポジティブな剥離面で、打面や剥片剥離作業面の剥離に切られており、本石核の素材を得る段階のものと思われる。また、正面下方や左右面の下方の剥離は一連のものと思われ、本石核の素材を得るために加撃でほぼ同時に剥離されたものと思われる。剥離作業面の剥離はすべて打面方向からの剥離である。左面の大きな剥離は裏面から剥離されており、腹面調整であると思われる。石材は黒曜石。7試掘坑出土。

剥片（第19図5・6、第20図） 5・6は石刀である。5の打面は細部調整がなされている。正面には、主剥離面と同一方向の剥離面と逆方向のものとがみられる。同一方向の剥離の方が新しい。石材は褐色メノ一質のチャートである。K 3出土。6は打面部が折れて欠損している。正面には、主剥離面と同一方向の剥離のみみられる。末端も折れている。黒曜石。G 4出土。

第20図1は、打面調整剥片である。打点部を欠損するが、石核打面から非常に浅い位置に加撃しており、打面再生を意図したものではないだろう。石核打面部には、大きな打面調整剥離と細部調整とがみられる。正面中央の一枚の剥離面以外の剥片剥離作業面の剥離は、すべて打面部の剥離に切られており、打面部の調整の進行段階で本剥片が剥離されたものと思われる。石刀石核の打面調整剥片と思われる。シルト岩製。10試掘坑より出土。



第19図 丘の公園第2遺跡出土石器（1）



第20図 丘の公園第2遺跡出土石器（2）

第20図2は、大型の綫長剥片である。打面は單剥離である。末端部が折れて欠損している。右縁下方には、横方向ないしはやや下方の方向からの加熱による、比較的大規模な剥離面が残存する。石核腹面調整か剥片剥離作業面の可能性がある。右縁上方には、自然面が残存する。シルト岩製。E 5 試掘坑出土。

3は、小型の綫長剥片である。打面部には若干の調整剥離がみられる。正面の剥離は、すべて主剥離面の剥離方向と同一方向である。末端部には若干の使用痕と思われる微細剥離が連続する。また、打面の頭部には、スレによる後の潰れがみられる。また、正面中央には、左上から右下に向って線状痕が若干みられる。黒曜石製。H 5 試掘坑出土。

4は、安山岩製の綫長剥片である。打面部には2枚の調整剥離がみられる。正面の剥離は、ほとんどが主剥離面の方向と同一であるが、右縁中央の1枚だけ横方向からの剥離である。7 試掘坑より出土。

5は、正面全体を自然面が覆う剥片である。打面は單剥離打面である。シルト岩。E 5 出土。

6は、ほぼ円形をした剥片である。末端の一部を欠損している。打面には細部調整がみられる。正面中央に広く自然面が残存し、主剥離面の方向と正逆両方向の剥離がみられる。石材は褐色メノー質のチャートである。出土試掘坑はK 3である。

### 丘の公園第3遺跡

#### 1. 試掘坑の配置（第21図）

試掘坑は、企業局が設定した100m方眼の座標杭およびその補助杭を基準にして設定した。昭和59年度の分布調査の際に、1カ所の試掘坑から縄文時代早期末の土器と剥片が出土した。この地点を中心には、直径50mの範囲に試掘坑を設定し、遺物が出土した地点については、周辺に5m間隔で試掘坑を設定した。調査地域の東側から南側にかけて、すでに道路が設置され、東側の谷部から南側の平坦面に至る肩部では、最高2m近くが掘削されていた。したがって、この道路の際までを調査地域とした。

昭和59年度の分布調査時に遺物の出土した地点の北側で遺物が出土したので、その周辺に5m間隔で試掘坑を設定した。さらにその北側に10m間隔で試掘坑を設定し遺跡の広がりを確認した。

#### 2. 遺跡周辺の地形

本地域は、丘の公園第1・2遺跡と違い、緩傾斜地に立地する。東側は急斜面で画されているが、河川の流れる低平地に至るには、南北にのびる細長い微高地を越えねばならない。

南側には同様な緩傾斜面が連続する。この緩傾斜面は丘の公園第2遺跡の南側から始まり、「丘の公園」地域の南端まで、約1,100mにわたって連続する。この高平坦地は、一部に風成堆積土層により、土壘状の高まりなど地形の乱れがあるが、ほぼ同様な傾斜面である。幅にはかなり変化があり、100mから200mである。比高は8m前後である。こうした高平坦地は、本地域の西側にもう1本ある。東側にも高平坦地があるが、非常に幅が狭く、部分的に島状にみられるのみである。

本地域西側や北側も緩傾斜面があるが、本地域は緩傾斜面によって構成される細長い台地状

の地形で、最も幅の広い部分であり、西側の急斜面まで約150mある。北側は約150m緩傾斜面が連続し、丘の公園第2遺跡に至る。

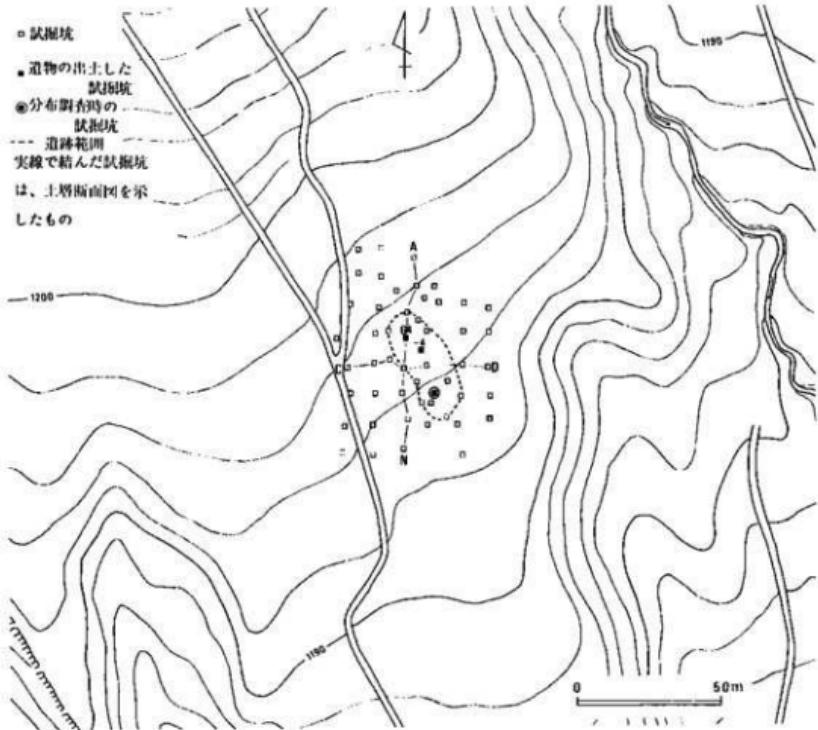
遺跡は、この緩傾斜面の東側肩部近くに立地している。

### 3. 層序

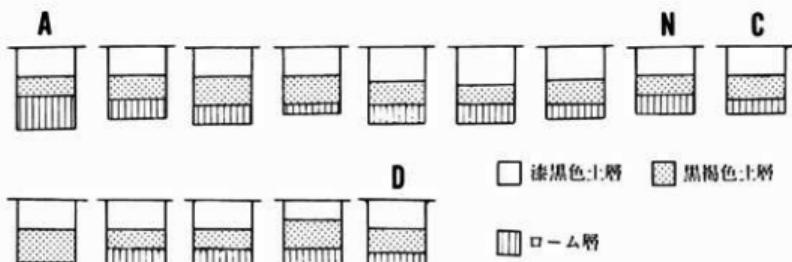
第22図に一部の試掘坑の土層断面図を示した。土層断面図は、第21図中で実線で結んだ試掘坑の配列順序どおりに配列した。アルファベットの付された土層断面図が始点と終点であり、第22図中のアルファベットの付された試掘坑と符合する。A・Cが始点で、N・Dが終点である。

土層は、基本的には黒色土層とローム層とからなる。最上位にしばしばみられる風成堆積土層は、本地域にはみられなかった。しかし、南西約50mの地点には風成堆積土層による土壌状の微高地が細長く南に続いており、本地域の南100mから500m、東西150mの地域は全体にこの土層が覆っている（山梨県教育委員会 1986）。

黒色土層は、上層の漆黒色土層と下層の黒褐色土層とに分かれ。漆黒色土層は非常に黒み



第21図 丘の公園第3遺跡試掘坑配置図 (1 : 4,000)



第22図 丘の公園第3遺跡土層断面図

が強く軟質である。黒褐色土層は上層より硬質である。下部にローム層との漸移層がある。漆黒色土層の厚さは25~40cm。黒褐色土層の厚さは15~35cmである。前者は30cm前後が多く、後者は25cm前後が多い。

ローム層は、ソフトローム層である。その上面より数十cm下位にハードローム層があるが、今回はその深さまで掘り下げなかった。

#### 4. 遺物（第23図）

本地域では50カ所の試掘坑を掘り下げ、2カ所から遺物の出土を確認した。昭和59年度の分布調査では、1カ所の試掘坑から縄文時代早期末の土器多数と刺片を得ているが、これを加えると3カ所の試掘坑から遺物が出土している。遺構の出土はない。

第23図1は、二次加工ある刺片である。非常に微細な刺片の刃縁部の両面に二次加工を行なっている。二次加工はいずれも小規模である。正面はほぼ1列で、裏面は正面よりやや規模の大きい剥離と非常に微細な剥離と2段にわたって剥離がみられる。素材は、正面が主剥離面である。裏面には素材の剥離面は1枚しかない。主剥離面の剥離方向とは逆方向の剥離で、規模も大きいと思われる。打面は自然面である。素材の3面を自然面が覆っている。石材はチャートである。出土した試掘坑は、G 4である。黒褐色土層の上面から下方へ約10cmほどの深さから出土した。縄文時代のもの可能性がある。

第23図2は、黒曜石の原石である。剥離面はまったくみられない。出土した試掘坑は、4の試掘坑である。ソフトローム層上面から約20cmの深度で出土した。



第23図 丘の公園第3遺跡出土石器

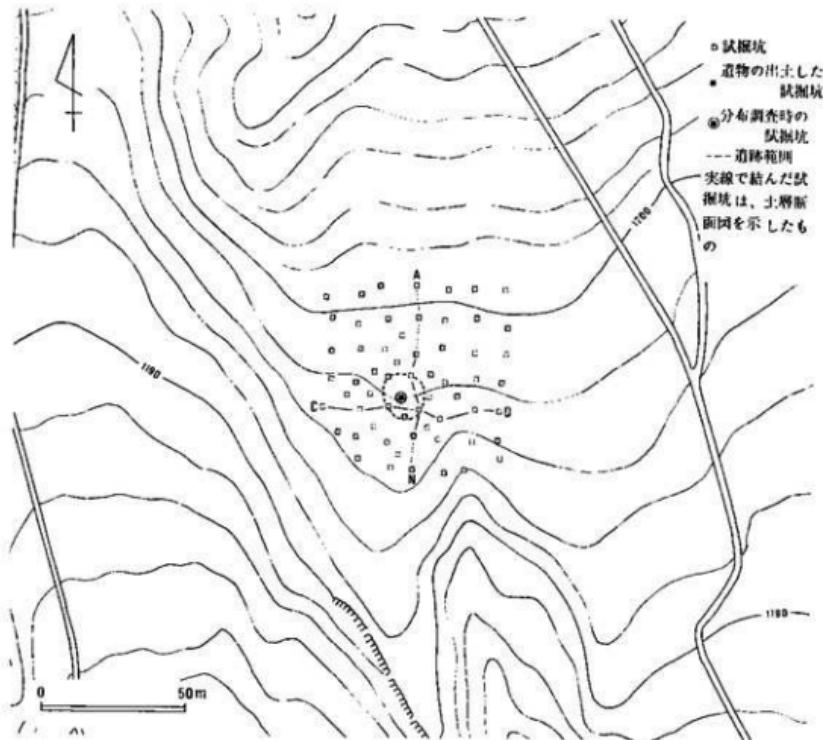
## 丘の公園第4遺跡

### 1. 試掘坑の配置（第24図）

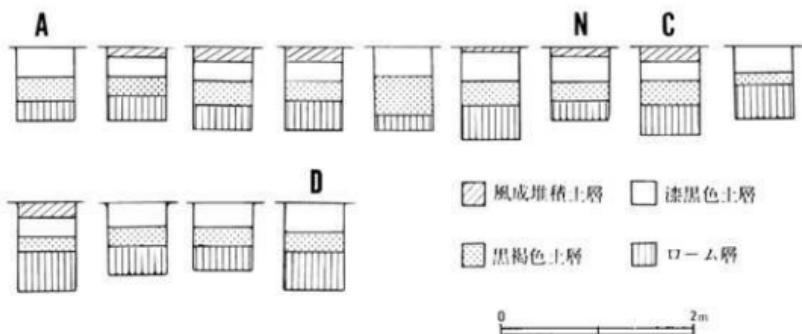
試掘坑は、企業局の設定した100m方眼の座標杭およびその補助杭を基準にして設定した。昭和59年度の分布調査の際に、1カ所から焼土造構が確認された（図版2）。黒色土層下部の黒褐色土層上部にあったので、縄文時代のものと考えられた。この周辺で縄文時代の遺物が分布している可能性が考えられた。その試掘坑を中心に直径50mの範囲に、10m間隔で試掘坑を設定した。さらに、焼土造構の出土した試掘坑の周辺では、5m間隔で試掘坑を設定し、遺跡の広がりを確認した。

### 2. 遺跡周辺の地形

本地域は、丘の公園第3遺跡同様、「丘の公園」地域に一般的にみられる緩傾斜面上に位置している。幅100mから200m、北高8m前後で、「丘の公園」地域を南北に横切る細長い高平地の、最も幅の広い部分の西側肩部近くに位置する。北側と東側に緩傾斜面が広がっている。南側には、調査地域の東側から始まる小谷が南に傾斜している。その西側にはやせ尾根状の細



第24図 丘の公園第4遺跡試掘坑配置図 (1 : 4,000)



第25図 丘の公園第4遺跡上層断面図

長い高地が、やはり南へ続いている。この地形の一部は、風成堆積土層によって構成されている。

西側には急斜面がある。これをおみると、谷底平坦地の低平な地形となる。ただし、低平地北部は、その北側を川俣川の崖線によって切られており、河川は現在はない。ここから約200m南の地点から湧水による小河川が出発している。

本地域北西部には、高平坦地の西側肩部に沿って、微高地がみられるが、風成堆積土層によるものである可能性がある。

### 3. 層序

第25図に一部の試掘坑の土層断面図を示した。土層断面図は、第24図中で実線で結んだ試掘坑の配列順序どおりに配列した。アルファベットの付された土層断面図が始点と終点であり、第25図中のアルファベットの付された試掘坑と符合する。A・Cが始点で、N・Dが終点である。

土層は、基本的には黒色土層とローム層とからなる。黒色土層は、上層の漆黒色土層と下層の黒褐色土層とに分かれる。漆黒色土層は非常に黒く、軟質である。黒褐色土層は上層より硬質で、下部にローム層との漸移層がある。漆黒色土層の厚さは15~30cmであり、20cm前後が多い。黒褐色土層は15~40cmで、25cm前後が多い。

本地域には、黒色土層の上位にしばしばみられる風成堆積土層が分布する。調査地域の西側にかたよって分布している。最も厚い所で15cmで、焼土遺構周辺が最も厚い。10cm前後が最も多い。この土層は、暗褐色で非常に軟質であり、下層との境界が直線的で非常に明瞭である。

### 4. 遺物

本地域では、60カ所の試掘坑を設定し掘り下げたが、遺物や遺構の出土は確認できなかった。昭和59年度では、焼土遺構が確認されていた。黒色土層下部の黒褐色土層の上部から出土している。丘の公園第3遺跡では、黒褐色土層の上部から縄文時代早中期の土器が出土しており、おそらく、この時期前後のものと思われる。また、丘の公園第1遺跡でも同層位から焼土遺構が出土している。いずれの焼土遺構とも同時期と思われる遺物を伴っておらず、また、周辺に

も分布がみられない状況であった。縄文時代早期のものとしては、遺物の集中出土地点と陥し穴があるが、それぞれ重なることなく、地点を別にして形成されるらしい。これも、当時の遺跡の一つのありかたであると考えられる。

## VI 遺跡の分布と範囲

今回の調査によって4カ所の遺跡の範囲確認ができた。丘の公園第1遺跡は、「丘の公園」地域最北端、最高所にある遺跡である。南北約200m、東西最大幅150mで、面積約14,000m<sup>2</sup>と非常に巨大な遺跡である。先土器時代のナイフ形石器や槍先形尖頭器が出土しており、本遺跡の大半が先土器時代のものと思われる。縄文時代の遺物は、早・前・中・後期の土器・石器と早期と思われる陥し穴や焼土遺構が出土した。縄文時代の遺物・遺構の分布は、かなり限定されている。第3図中に遺跡の範囲を破線で示した。

丘の公園第2遺跡は、南北約30m、東西約70mで、面積約2,000m<sup>2</sup>の遺跡である。先土器時代のナイフ形石器が出土しており、遺跡の全域がほぼこの時代のものと思われる。また、縄文時代早期と思われる陥し穴が出土した。第17図中に遺跡の範囲を破線で示した。

丘の公園第3遺跡は、南北約30m、東西約10mで、面積300m<sup>2</sup>ほどである。原石ではあるがローム層中から遺物が出土しており、先土器時代の遺跡の広がりが考えられる。縄文時代の早期の土器も確認されている。第21図中に遺跡の範囲を破線で示した。

丘の公園第4遺跡は、縄文時代早期と思われる焼土遺跡が出土しているのみの遺跡である。第24図中に遺跡の範囲を破線で示した。

これらの遺跡は、「丘の公園」地域を南北に横切る、幅100mから200m、比高8m程度の細長い高平坦地上に立地している。丘の公園第1・2遺跡は、この高平坦地の北部にあるテラス状に2段にわたって連続する非常に平坦な地形を占居している。この地形は本地域には稀なものであり、そこに先土器時代の大型遺跡が立地している点注目される。

ところで、高根町教育委員会による町内遺跡分布調査報告書では、丘の公園第1～3遺跡が「丘の公園地内遺跡群No.1～3」となっているが、本報告書の名称に統一したい。同様に、「清里の森遺跡群No.1～3」は、それぞれ清里の森第3～1としたい。

### 引用・参考文献

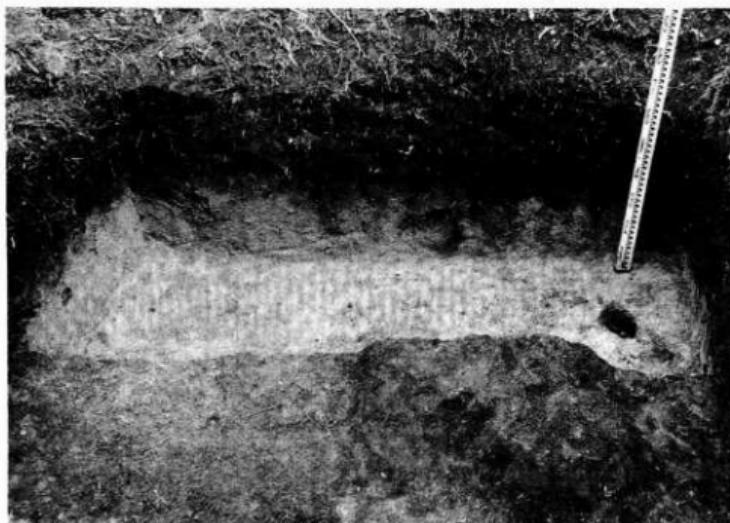
- 磯貝正義、飯田文弥 1973 『山梨県の歴史』  
山梨県教育委員会、企画局 1985 『丘の公園14番ホール遺跡範囲確認調査報告書』  
山梨県教育委員会 1986 『八ヶ岳東南麓遺跡分布調査報告書』  
高根町教育委員会 1987 『町内遺跡分布調査報告書』



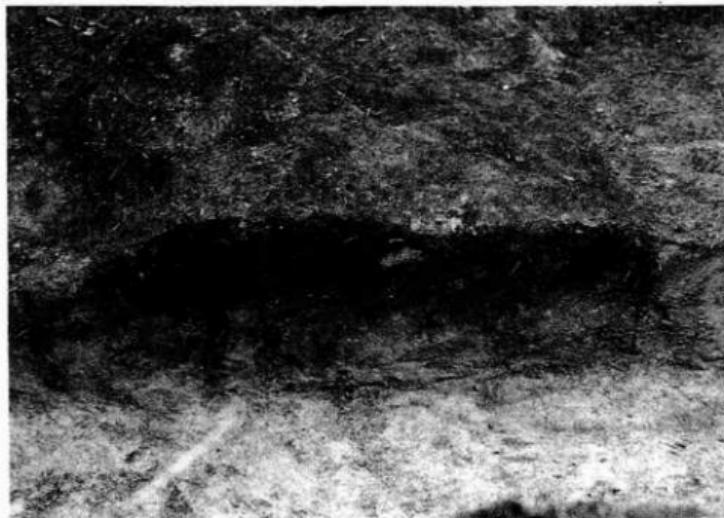
丘の公園第1遺跡調査風景



丘の公園第1遺跡 E 10試掘坑遺物出土状況



丘の公園第4遺跡焼土遺構（昭和59年度分布調査時出土）



丘の公園第4遺跡焼土遺構拡大



6-1



6-2



6-4



6-3



6-5



6-6

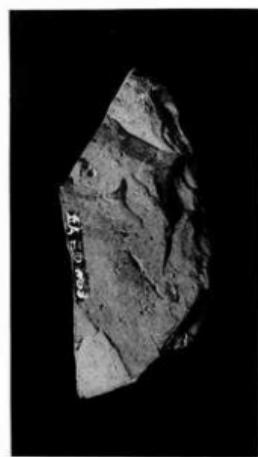
丘の公園第1遺跡出土石器(1) (番号は挿図番号と一致)



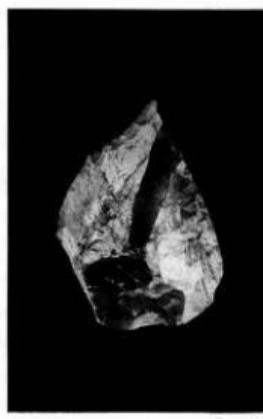
6-7



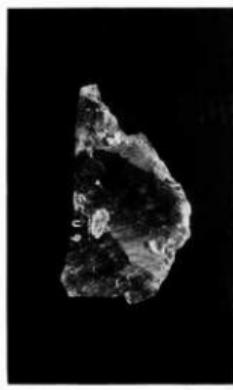
6-8



7-1



7-5

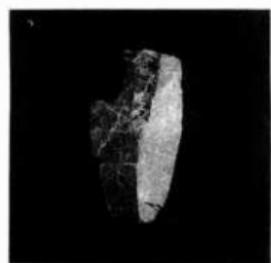


7-4



7-5

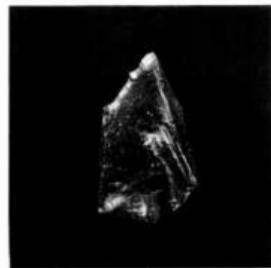
丘の公園第1遺跡出土石器(2)(番号は挿図番号と一致)



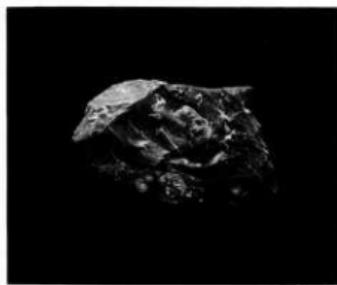
7-6



8-4



8-6



8-3



10-7



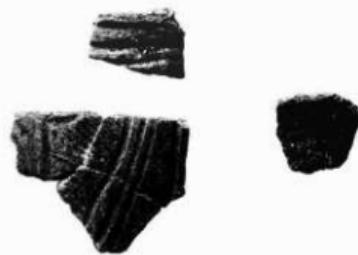
10-8

丘の公園第1遺跡出土石器(3) (番号は挿図番号と一致)



14-1

14-3~9



右14-2，左15-1・2



15-10・11



15-3~9, 12



15-13~22



16-1~3

16-4~6

丘の公園第1遺跡出土遺物（番号は挿図番号と一致）



19- 1



19- 5



19- 2



20- 2

丘の公園第2遺跡出土石器（番号は挿図番号と一致）

山梨県埋蔵文化財センター調査報告第26集  
丘の公園地内遺跡範囲確認調査(第1次)  
報告書(丘の公園第1・2・3・4遺跡)

印刷日 昭和62年3月25日  
発行日 昭和62年3月31日  
編 集 山梨県埋蔵文化財センター  
発行所 山梨県教育委員会  
山梨県企業局  
印刷所 合資会社 ヨネヤ印刷

